

千島アイヌの伝統文化と文化変化について

TRADITIONAL CULTURE AND CULTURE CHANGE OF THE KURIL AINU

佐々木 亨*

SASAKI Toru

In this paper, I take a general view of the history of the Kuril Ainu and the natural environment around the Kuril Islands. Next, I focus on their sea mammals and birds based subsistence, and their spiritual world including legends, myths and traditional rituals in the 19th century. Moreover, I consider cultural changes of the Kuril Ainu, caused by contact with the Russians and Japanese.

この論文では、はじめに千島アイヌの歴史および自然環境を概観する。次に、19世紀における海獣や鳥類に依存していた生業と、伝説・神話や伝統的儀礼などの精神世界を紹介する。最後に、ロシア人および日本人との接触による千島アイヌの文化変化を考察する。

1 千島列島の概要

(1) 歴史

千島列島が地図に現れたのは、日本においては1644年である。また、ロシア人がカムチャツカ半島において千島アイヌと接触したのが1697年、各島の探検に着手したのが1711年といわれている。

その後におけるロシアの南下、日本の北進の

歴史は、高倉 [1960:26-120]、北構 [1980:122-124]、秋月 [1992:121-132]、川上 [1995:63-78] の論文などに詳しい。それらによると、ロシアは1713年にはオンネコタン島まで、1766年にはシムシル島まで、ラッコやキツネの毛皮をヤサクとして千島アイヌに納めさせていた。1767年には千島列島における前線基地をウルップ島に設置し、翌年にはエトロフ島においてもヤサクを徴収していた(図1)。

一方、日本は1754年にクナシリ島、1799年にはエトロフ島を支配した。1786年にはエトロフ島、ウルップ島において地理調査が行われ、ウルップ島以北の島々についての詳細な知識を手に入れた。その際、それらの島々はロシアが支配していることを認識した。1801年には、ウル

* 北海道立北方民族博物館学芸課学芸員

Assistant Curator, Curatorial Section, Hokkaido Museum of Northern Peoples

ップ島にきていたロシア人植民者に帰国勧告をし、1805年にはロシア人がこの島から退去した。この時点で日本の領土はエトロフ島まで、ロシアはシムシル島までという、両国間の国境認識ができあがった。この国境認識により、ウルップ島以北の北千島においては1875年の千島樺太交換条約まで、千島アイヌのロシア化が進んだ。1884年には、日本領となった北千島に住むアイヌ全員は、北海道に近いシコタン島に移住させられた。

なお、以下に「千島アイヌ」というときにはウルップ島以北、つまり図1の1～25番の島に住むアイヌのことを言うこととする。

(2) 自然環境

千島列島は、北海道とカムチャツカ半島との約1,100kmに連なっている約30の島や岩からなり、晴天の日には、次の島をみることができるぐらいの間隔に位置している。しかし、海峡を流れる潮流は激しく、各島の海岸は断崖絶壁が続き、暗礁も多い。夏には濃霧が発生し、夏が過ぎると強風で海が荒れるため、安全な航海

は困難となる。また、2月にはオホーツク海方面から海水が押し寄せ、島々のオホーツク海側の海岸や海峡には海水が流れ着くが、太平洋側については海水で覆われることはない。この海水が沿岸部から消えるのは4月下旬から5月上旬頃である。したがって、舟による移動に適する時期は、春のわずかな時期に限られている。

北千島の25の島と岩のうち15島以上に活火山があり、18～19世紀の間で10回以上におよぶ噴火があったことが、多羅尾 [1974] や北海道庁 [1975] の報告に記録されている。1872年のシャシコタン島における噴火では、狩猟に来ていた千島アイヌ13人がその被害に遭い死亡した [北海道庁1975:46]。

2 生業

(1) 動物の分布

次に、千島列島またはその周辺に生息する、海獣、陸獣、鳥類、魚類をまとめる。ここでは、多羅尾 [1974:78-103]、北海道庁 [1975:33-68] により報告されている、19世紀末における各島



図1 千島列島

またはその周辺で捕獲できた動物を整理した。

海獣では、アザラシ、トド、オットセイ、ラッコ、クジラがこの地域に生息している。

アザラシ、トドはウルップ島からアライド島まで、ほぼ全域にわたって生息していることがわかる（表1）。ムシル島、アライド島ではアザラシ、トドがともに群棲している。オットセイは、スレトネバ島、ライコケ島に群棲しており、スレトネバ島の岩礁地帯は夏の間、オットセイが来遊して、繁殖するところとして知られている。この島では、1881年に外国の密漁船がオットセイ5000頭を捕獲した。

ラッコはウルップ島、チエルボイ南・北島、プロトン島周辺に数多く見られる。しかし、これらの報告の時点では、乱獲のためもうすでにその数はかなり減少していた。

千島列島では全般的に陸獣はあまり生息してなく、最もよくみられるものはキツネである（表2）。クマはパラムシル島、シュムシュ島にのみ生息し、特にパラムシル島に多い。

鳥類は、プロトン島からラショワ島にかけての島々に多く、エトピリカやチシマウガラスのほか、カモメ、カモ、ワシがみられる（表3）。

表1 海獣の分布

	アザラシ	トド	オットセイ	ラッコ	クジラ
1 ウルップ（得撫）島	◎	◎	△	●	
2 チエルボイ（知理保以）南島		△		●	
3 チエルボイ（知理保以）北島	△	◎		●	
4 プロトン（武魯頓）島		●		●	
5 シムシル（新知）島	△	△			
6 ケトイ（計吐夷）島				△	△
7 ウシシル（宇志知）島				◎	
8 スレトネバ（摺戸）島	◎	●	●	◎	
9 ラショワ（羅処和）島	◎	◎		△	
10 マツワ（松輪）島	◎	◎		△	
11 パンジョウ（盤城）島			●		
12 ライコケ（雷公計）島		△	●		
13 ムシル（牟知）島	●	●			
14 シャシコタン（捨子古丹）島				●	
15 エカルマ（越満磨）島	◎	◎			
16 チリンコタン（知林古丹）島		◎			
17 ハルムコタン（春牟古丹）島	◎	△		△	
18 オンネコタン（温祢古丹）島	△	△		●	
19 マカシル（磨勘留）島	◎	△		△	
20 アボス島（帆掛島）	◎	●		△	
21 シリンキ（志林規）島	◎	●			
22 パラムシル（幌筵）島	◎	◎	△	△	△
23 鳥島	●			△	
24 シュムシュ（占守）島	◎	◎		△	△
25 アライド（阿頼度）島	●	●			

●◎△はその動物の数が極めて多い、普通、稀であることを表す。

ケトイ島は、ラショワ島に住むアイヌがワシを捕るために、ウシシル島の北島はワシ、カモを捕るために越冬した場所として知られている。パラムシル島とオンネコタン島の周辺にある小さな島では、カモが多くみられる。特に、シリッキ島では夏の間、パラムシル島のアイヌがカモとともにアザラシ、トドを捕ったことが知られている。

ウルップ島、シムシル島、オンネコタン島、パラムシル島、シュムシュ島の河川には、シロ

表2 陸獣の分布

	クマ	キツネ	ネズミ	テン	オオカミ
1 ウルップ（得撫）島		◎	△	△	
2 チエルボイ（知理保以）南島					
3 チエルボイ（知理保以）北島		△			
4 プロトン（武魯頓）島		△			
5 シムシル（新知）島		△			
6 ケトイ（計吐夷）島		●			
7 ウシシル（宇志知）島					
8 スレトネバ（摺戸）島					
9 ラショワ（羅処和）島		◎	△		
10 マツワ（松輪）島		◎			
11 パンジョウ（盤城）島					
12 ライコケ（雷公計）島					
13 ムシル（牟知）島					
14 シャシコタン（捨子古丹）島		△			
15 エカルマ（越満磨）島					
16 チリンコタン（知林古丹）島					
17 ハルムコタン（春牟古丹）島					
18 オンネコタン（温祢古丹）島		●			
19 マカシル（磨勘留）島		△			
20 アボス島（帆掛島）					
21 シリンキ（志林規）島					
22 パラムシル（幌筵）島	●	◎	●		
23 鳥島					
24 シュムシュ（占守）島	◎	◎			△
25 アライド（阿頼度）島		●			

●◎△はその動物の数が極めて多い、普通、稀であることを表す。

表3 鳥類の分布

	エトピリカ	チシマウガラス	カモメ	カモ	ワシ
1 ウルップ（得撫）島	○			○	○
2 チエルボイ（知理保以）南島	○				
3 チエルボイ（知理保以）北島					
4 プロトン（武魯頓）島	●				
5 シムシル（新知）島	●	●	●		
6 ケトイ（計吐夷）島		○	○		●
7 ウシシル（宇志知）島		●		●	●
8 スレトネバ（摺戸）島					
9 ラショワ（羅処和）島			●	●	
10 マツワ（松輪）島					
11 パンジョウ（盤城）島	○				
12 ライコケ（雷公計）島					
13 ムシル（牟知）島					
14 シャシコタン（捨子古丹）島					
15 エカルマ（越満磨）島				○	
16 チリンコタン（知林古丹）島				○	
17 ハルムコタン（春牟古丹）島					
18 オンネコタン（温祢古丹）島					
19 マカシル（磨勘留）島					
20 アボス島（帆掛島）				●	
21 シリンキ（志林規）島				●	
22 パラムシル（幌筵）島				○	○
23 鳥島				●	
24 シュムシュ（占守）島	○	○	○	○	
25 アライド（阿頼度）島					

●○はその動物の数が特に多い、普通を表す。

ザケ、カラフトマス、マスノスケ、オシヨロコマのうち、1つまたはいくつかが遡上する。この5島以外の島は、河川が短く、きわめて急流であるため、これらの魚の遡上はみられない。また、千島列島の沿海にはタラ、ヒラメ、カレイ、オヒョウといった魚が豊富に生息している。

(2) 移動生活と生業

伝統的には北海道アイヌは、エゾシカ、ヒグマ、キタキツネなどの陸獣を狩猟してきた。なかでもエゾシカの肉は食料として最も多く利用され、多く捕れたときは干し肉に加工された。また、狩猟とともに漁撈や植物採集も重要な生業であった。夏から秋にかけては、河川を遡上するカラフトマスやシロザケを簗や鉤鉈で大量に捕獲し、乾燥させ冬の食料として貯蔵した。また、北海道太平洋側の噴火湾沿岸地域やオホーツク海沿岸地域では海獣狩猟も行われていた。

千島列島の島々には、北海道アイヌが最も食料として依存していたエゾシカを含め、陸獣が極めて少ない。また、狩猟とともに重要な生業である河川における漁撈も5島においてしか期待できない。この漁撈も、シュムシュ島においては、冬の間の食料を満たすほど十分な量を捕獲できるわけではなかった〔Krashennikov 1972:58〕。さらに、主要な食料となるアザラシ、トドといった海獣、エトピリカ、カモなどの鳥類は、千島アイヌが居住している島のほか、人が生活できないような小さな島に多く生息していた。したがって、よほど恵まれた土地に住む千島アイヌ以外は、食料となる動物を求めて、集団で季節的な移動を繰り返していた。

千島アイヌの居住地には、永続的な居住地としての「コタン＝バ」と狩猟のための一時的な滞在所「オンルフスシ」があった〔鳥居1976:329〕。「コタン＝バ」はシュムシュ、パラムシル、ラショワの3カ所で、若者や頑健な男

女は、狩猟の季節が来ると各島に分散し、コタン＝バには老人と子供が残った。時には、何年もコタン＝バに戻れず、他の島で越冬することがあった。一般的に移動の際に用いる舟は、北海道アイヌにもある木製の板綴り舟である。流木や難破船を利用して作り、長さが9 mにおよぶものもあった〔鳥居1976:432〕、〔林1984:184〕、〔スノー1980:52〕。また、海獣の皮で作った舟「バイダル」も用いられていた〔林1984:184〕という記述がある。

千島アイヌの生業カレンダーを詳細にまとめた報告はないが、北海道庁〔1975:98〕の報告に若干の記述がある。

- ・アザラシ、トド：通年（衣食用）
- ・ラッコ：12～4月（衣食用であったが、後にもっぱら交易用となる）
- ・オットセイ：夏期（交易用）
- ・キツネ：冬期（衣服用であったが、後にもっぱら交易用となる）
- ・鳥類：通年（衣食用）　ワシは交易用として冬期に捕る。

植物は30種類が食用として用いられており、特にユリの根は海獣や鳥の肉のスープに欠かせなかった。ハルムコタン島、オンネコタン島はユリが多く生育している島で、ハルムコタン島の「ハル」はユリを意味する北千島アイヌ語である。また、海藻類や冬期保存食用の植物も非常に種類が多かった〔鳥居1976:453-454〕。

最後に、カムチャツカ半島から強い影響を受けているシュムシュ島、パラムシル島における生業の特徴をみると、クジラ猟やクマ猟が行われており、パラムシル島ではクジラとクマの猟場を示した正確な地図があった〔鳥居1976:335〕。シュムシュ島では、獲物を運ぶためにイヌ橇が特に盛んに用いられていた〔鳥居1976:427〕。ロシア人が与えた牛を数十頭飼育していたことがあるが、狩猟に出かけるため、常時注意して

飼育することはできなかった。またロシア人から耕作を習い、わずかに馬鈴薯を作っていた〔北海道1975:99-100〕などがあげられる。

3 精神世界

(1) 伝説・神話

鳥居〔1976:445-447, 469-483〕は、千島アイヌにおける神々や伝説・神話について報告している。それによると、千島アイヌの主な神々は、次の通りである。

- 1 「カンナン＝カムイ」（雷神）：しばしば海に出てきて、好んで魚をとる。信心深い千島アイヌは、危険に瀕したときに、この神に多数のイナウを捧げ祈祷する。また、この神はウシシル島を創ったと考えられている。
- 2 「チャマ＝カムイ」（火の神）
- 3 「ペ＝カムイ」（水の神）
- 4 「アツイカ＝カムイ」（海の神）：この神が地上に来るとクマの姿をする。地上に住む山の神の弟とされている。かつて地上にすんでいたがある日、人間の暴力を受けて海に退いた。
- 5 「キムタ＝カムイ」（クマ、山の神）：山に住むクマ自身である。「カンナン＝カムイ」に次ぐ神で、「アツイカ＝カムイ」の兄である。
- 6 「ポワン＝カムイ」（太陽の神）
- 7 「キンタ＝カムイ」（キツネの神）
- 8 「チャチャ＝カムイ」（トドの神）：最も有益な神といわれている。

この報告のなかに、15の伝説・神話が紹介されている。このうち、島の創世に関するものが5つ、モチーフに実存の動物が登場するものは6つあり、その内訳はクジラが4つ、シャチが1つ、クマが1つである。そのほか、空想の生き物や幽霊に関する伝説がそれぞれ1つずつある。

クジラをモチーフにしたものには、千島アイヌ自身のクジラに対する恐れを表したものが2

つ、クジラ捕りの際に半神半人の巨人が死んでしまうという話が2つあり、そのどれもが千島アイヌにとってクジラはネガティブな存在であったことが述べられている。

シャチに関する話は「シャチは総じて魚の姿をしているが、中には人間の姿をしたものが出て、舟に近寄ってきて腕を伸ばした」というものである。これは人間とシャチの関係が親密であることを物語っている。一方、クマに関するものは「カムチャッカにクマを捕りに出かけた兄弟がいた。その弟がある日、クマから恩義を受けた。そのお返しにクマをもう殺すようなことはしないから、肉を食べることもないと言った。しかしその後、兄がクマを殺し、兄弟でその肉を食べた。それ以降、クマは人間の敵となり、人間を襲うようになった」というものである。シャチとは反対に、人間とクマとの敵対関係が述べられている。

(2) 伝統的な儀礼

移動は千島アイヌの生業において大きな部分を占めている。そのため、舟による航海は実生活のなかで非常に重要であり、イナウや木偶を媒介にして、海の神に航海の安全を祈願していた。

千島アイヌが所有していたイナウや木偶の形態についての記述は極めて少なく、また実物資料としても今日あまり保存されていない。しかし、シコタン島に移住した千島アイヌの老婆が持ってきていた2種類のイナウが、1934年に杉山寿栄男と林欽吾により発見され、その詳細が名取〔1959:98-104〕により報告されている。

イナウ1：イトクパの刻まれた2本のイナウに、以下の4つが包まれていた（図2）。

- (a) 木彫りのオオカミ（またはキツネ）
- (b) 木彫りのクマ
- (c) 木彫りのシャチ
- (d) トリカブト毒がついた竹の矢

以上4つがトドの皮紐で結ばれている。

イナウ2：2本のイナウに大きな木彫りのシャチが付いている（図3）。また2本のイナウの先端にはクマとシャチを表わしていると思われるイトクパが刻まれている。

1899年に鳥居龍蔵がシコタン島で収集した千島アイヌのイナウは、2本が雷の神に、1本が海の神に捧げるものである。このほか、海の神に捧げるイナウに付けるシャチをかたどった木彫りが、ラショウ島で収集された〔国立民族学博物館1993:83,87〕。

一方、山およびクマに関する儀礼・信仰は極めて少ない。クマは実際にシュムシュ島、パラムシル島に生息するが、北海道アイヌ、サハリン・アイヌの社会において重要な役割を果たし

ている「クマ送り」は、千島アイヌでは行われていなかった。また、キムタ＝カムイ（クマおよび山の神）に捧げるイナウは、カムチャッカに向けて立てられる。これは伝説において、かつて千島アイヌがカムチャツカ半島においてクマを裏切って殺したことに対する謝罪と考えられている〔鳥居1976:448〕。

4 文化変化

(1) ロシア正教の影響

ロシアの南下とともにロシア正教が広まり、1784年にはシムシル島のアイヌもキリスト像を持つようになった。ほかの島でも十字架、キリスト像やロシア皇帝像がみられた。1811年に千島アイヌに会ったロシア人海軍士官のゴロウニン〔1994:448〕は、ロシア領のアイヌは、ロシア人の前ではロシア正教徒と見せかけるため、十字架やキリスト像を首にかけ祈祷する。ロシア人が伝統的な儀礼を知りたいとたずねても「我々はロシア人と同じで、信仰する神はただ1つ」と偽り、いまだに伝統的な習慣や信仰を守っていると報告している。1934年にシコタン島でアイヌの調査をした林欽吾〔1984:190〕は、ロシア正教を信仰しても、千島アイヌは固有の信仰を捨てず、現世における実利的な期待は固有の宗教によったとしている。航海に出て天候が急変し舟が危難にあったときや1884年のシュムシュ島からシコタン島に移住するための大航海を行うときは、イナウを海に投げ入れたり、船首に大きなイナウを掲げるなど伝統的信仰が全面に出ていたのはそのためと考えられる。ただし鳥居龍蔵〔1976:449〕は、18世紀末の記述では、イナウとともに木偶があったが、ロシア正教会の信者になってからは、木偶は崇拝の対象ではなく、玩具か人形になってしまったと報告し、キリスト像に代わったことを示唆している。

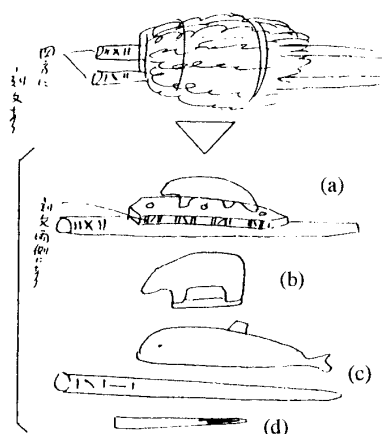


図2 イナウ1と木彫りの動物〔名取1959:100〕

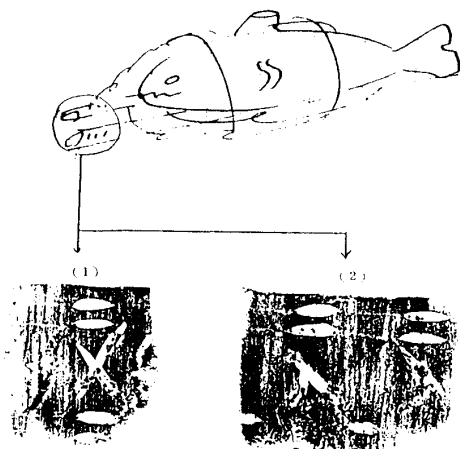


図3 イナウ2とイトクパ、ならびに木彫りの動物〔名取1959:100〕

ロシア正教が浸透して、千島アイヌの伝統的儀礼のなかで最も変化した部分は、主として死者の扱いならびに結婚の儀式だけのように思われる。

千島アイヌでは、男性が死ぬと家族は北海道アイヌと同様に、小屋を焼き、他に移り住んだ。埋葬の際は、エトピリカなどの最も美しい服を着せ、皮の長靴、刀を腰につけ、「キナ」という莫産で死体を丁寧にくるみ、頭を西に向け、その足もとには90cmほどの墓標「グワ」を立てた〔鳥居1976:451-452〕。しかし次第に墓標はすべて十字架となり、固有の墓標は使わなくなった〔林1984:188-189〕。また、シコタン島に千島アイヌが移住させられた1884年以降は、死者をくるむキナに代わってロシア正教で用いる寝棺が使われた〔北海道庁1975:101〕。また結婚の儀式は、ロシア正教を信じるようになってから、司祭職により執り行われるようになった〔北海道庁1975:101〕。

(2) ヤサクの徴収と居住地の南下

ロシアは千島列島を南下し、島々を本格的に支配下に組み込んだのは1766～1768年であり、18世紀はじめ頃には千島アイヌからヤサクを徴収していた。

ロシアは支配域を広げながら、その前線においては各島の人口、衣食住などの状態、習慣・宗教、武器の有無、長の存在とその帰属などについて調査するよう命令していた。その際、服従を逃れ、島を離れる者（流移人）に対しては問責をせず、もとの島に帰還させること、しかし移った島が生業に適するならば居住させてもかまわないとしていた。実際、パラムシル島ではロシアの支配を拒み、男40人、女63人がオンネコタン島に逃れていた〔ポロンスキイ1974:10〕。このようにロシアの南下により、千島アイヌの居住地が次第に列島の南の島に移動したケースもあったといえる。

(3) 日本による支配の影響

1875年の千島樺太交換条約以降、1884年千島アイヌのシコタン島への移住までの間、日本政府による千島アイヌの保護政策が行われた。

千島樺太交換条約以降、北海道開拓使は日本政府から千島アイヌ教育費として3年ごとに交付金を受け、そのために巡視船が3回にわたり派遣された。そこでは、食料品・衣服その他日用品を千島アイヌに提供し、そのかわりに千島アイヌの得た毛皮を徴収した。しかし、シュムシュ島はロシアと国境を接しているうえ、千島アイヌの生活のかなりの部分がロシア化し、さらにロシアを本国と考えている者をそのまま居住させることは国境を正したことにならないなどの理由から、千島アイヌ97名に対して1884年に、北海道に近いシコタン島への移住勧告をした〔高倉1972:476〕。

移住後、千島アイヌは島の北部のシャコタン湾に定住させられ、保護のもと集団生活を強いられた。もともと季節的な移動を繰り返しながら、トドやアザラシなどの海獣やカモやエトピリカなどの鳥を捕って生活してきた千島アイヌにとって、この移住はさまざまな文化変化を引き起こした。

生業においては、漁船や漁網を与えられ、ウシ、ヒツジ、ブタ、ニワトリの飼養が導入され、農耕も指導奨励された。しかし、これらは急速な変化であり、また豪雨による洪水や家畜の斃死も重なり、これらの試みは失敗した。1899年にはわずかに暇なときに馬鈴薯や野菜を作るのみになっていた〔北海道庁1975:100〕、〔林1984:194-195〕。1898年から政府はアイヌの希望により、毎年20人を北千島警戒のため派遣される軍艦に同乗させ、その地で狩猟に従事させた。しかし1908年にはそれも中止せざるを得なくなった〔高倉1960:124〕。

1930年頃においては、シコタン島に移住した

アイヌの最大の生業は夏の海草採集であり、それらは本州に送られていた。そのため島の北部から、海草が採りやすい南部の太平洋側海岸部に分散して定住するようになっていた〔林 1984:198〕、〔ベルクマン1986:304〕。

宗教では移住前と同様に、ロシア正教の信仰が厚く、婚礼葬礼はこの宗教に則って行われた。移住の9年後には色丹ハリスト正教会ができたが、それまでの間は伝道師が来島していた。一方、大谷派本願寺はアイヌ教化のために、僧侶を派遣し説教所を1898年に設けた。しかし布教上の活動は見られず、ただアイヌに酒を飲まし、金品を施すなどして関心を引かせ、教門に導こうとたくらむのみであった。それにより、ロシア正教会と信徒争奪において反目し合っていた〔北海道庁1975:143-144〕。

以上、千島アイヌにおける伝統文化とその文化変化について概観した。しかし、千島アイヌの文化を記述したものは、1899年に千島列島において考古学・民族学調査を行った鳥居龍蔵が残した民族誌のほかに、18～19世紀にロシア人や日本人が行った調査、探検の記録として発行されているのみである。それらの数は決して多くなく、また内容的にも偏りがあるため、伝統的な千島アイヌの文化については、今回紹介した部分を含めまだ充分わかっていないのが現状である。

1995年夏に荻原眞子氏（千葉大学）が中心となって、サンクトペテルブルグにあるロシア科学アカデミー人類学民族学博物館において、サハリン・アイヌ、北海道アイヌの資料とともに千島アイヌの実物資料の調査が行われた。いままでは知られていなかった千島アイヌの文化を解明するためには、このような物質文化に関する調査が、今後重要な役割を果たすと考える。

引用文献

- 秋月俊幸：「千島列島の領有と経営」『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』121-138 岩波書店 1992
- 川上 淳：「18世紀後半～19世紀初頭の千島アイヌについて」『根室市博物館開設準備室紀要 9』61-79 1995
- 北構保男：「千島アイヌ史序説」『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』119-155 新日本教育図書 1980
- 国立民族学博物館：『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』財団法人千里文化財団 1993
- ゴロウニン（徳力真太郎／訳）：『南千島探検始末記』同時代社 1994
- スノー H.J.（馬場脩・大久保義昭／訳）：『千島列島黎明記』講談社 1980
- 高倉新一郎：『千島概史』南方同胞援護会 1960
- 高倉新一郎：『新版アイヌ政策史』三一書房 1972
- 多羅尾忠郎：『千島探検実記』国書刊行会 1974
- 鳥居龍蔵：「考古学民族学研究・千島アイヌ」『鳥居龍蔵全集 5』311-553 朝日新聞社 1976
- 名取武光：「樺太千島アイヌのイナウとイトクパ」『北方文化研究報告14』79-114 北海道大学北方文化研究室 1959
- 林 欽吾：「色丹島の千島アイヌ」『千島・樺太の文化誌』169-214 北海道出版企画センター 1984
- 北海道庁：『北千島調査報文』北海道出版企画センター 1975
- ベルクマン S.：「千島紀行」『フラム号漂流記』221-309 教育社 1986
- ポロンスキイ（駐露日本公使館／訳・林欽吾補註）：『ロシア人日本遠訪記』原書房 1974
- Krashennnikov：『Explorations of Kamchatka 1735-1741』Oregon Historical Society 1972